第34回技術士のタベ講演会レジュメ（案）

（H25．3．1（金）16：00～18：00開催）
場所　技術士会葦手第二ビル5階A・B会議室
参加者 40 名（講師を含む）

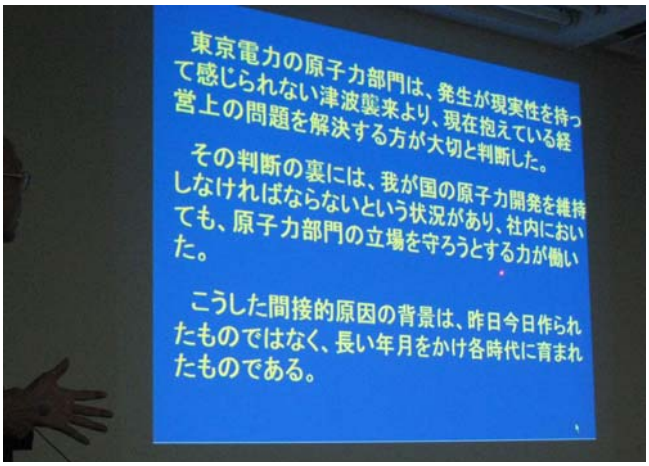
1．講演
　講演者：北村　俊郎氏
　講演題目：「福島第一原発事故から学ぶこと」
2．講演内容

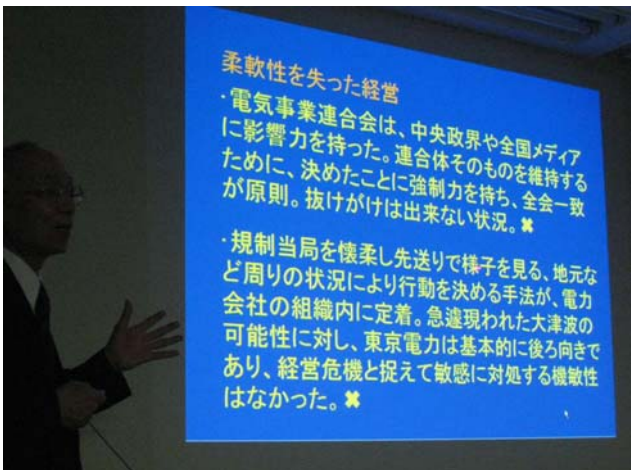
北村氏は日本原子力発電会社入社後、主に事務畑を歩き、特に発電所現場の安全管理強化、本社においては人材育成に尽力され、現場工事の直営化による社員の技術力向上に貢献された。退職後は原子力産業協会参事を経て、現在は原子力安全推進協会のアドバイザーとしてご活躍中である。

自宅が福島第一原発と第二原発のほぼ中間の富岡町（一部帰還困難区域）にあることから、3.11 直後から一転避難民の立場を余儀なくされ、避難生活も間もなく 2 年が経過するとの事である。一方でその間の心境を綴った「原発推進者の無念」を発刊されており、本日は原子力発電の現場実態や変遷を熟知した立場と、一転避難民としての立場からの体験を基に 3.11 福島第一原発事故についての鋭い視点からの講演を頂いた。以下はその要旨である。

事故には直接原因があるが、そこには歴史によって積み上げられてきた間接原因が存在する。その背景を、過去の原子力開発歴史を振り返り、第 1 期（始まり）、第Ⅱ期（拡大）、第Ⅲ期（閉塞）の3つの時代に区分し解説された。第Ⅰ期は負の局面を持つ原子力を平和利用のために、政治、産業界がリードしてきた。その中で原子力安全は研究機関が扱う学問分野であり、電力会社においても原子力部門は特別扱い的な存在であった。第Ⅱ期は盛んな原発建設期で、敷地難から１サイトへの集中（複数機プラント）が起こり、規制は事故トラブル対応が中心で形式化し規制改革が進まず、電力も規制対応が主となり現場の対応力や技術力が低下した。一方、地元も原子力は安全で事故は起こらないものと思い始め、反対派と一部メディアは安全神話を作り上げ、電力も古いプラントは十分安全が保たれていると言わざるを得ない状況に置かれた。第Ⅲ期は、安全文化が重要と言われたが言葉だけの形式的な安全に過ぎず、地球温暖化対応、地元も地域経済のメリットに注目が集まる中、本質的な安全への関心が後回しにされた時期ではではなかったかと分析された。その矢先に 3.11 福島第一原発事故が発生した。

更に、これらの背景を「形式主義」「国民の合意」「責任の分散」「安全の考え方」「共同体化」「経営力」の 6 項目の危険因子にまとめて話された。日本における「形式主義」（内容よりも形を重んじる建前論）が、原子力安全を脅かしてきた。これは防災体制に顕著に現れており、防災訓練の想定や実施が甘かったほか、電力も過酷事故に対する訓練が十分とは言えなかった。規制も書類中心の形式的な検査で、かえって電力社員に疲弊を与え、現場技術力が低下した。また、過酷事故の対策は国の要件ではなく電力自主とされてきた。日本は、「国民合意」による自主、民主、公開の3原則の下、新しい原子力エネルギーを国策民営で進めて来たが、責任回避の連鎖と相互利益関係、イ





デオロギー的な面で必ずしもこれが全国民と共有されたわけではなかった。そこで反対派や一部メディアとの不毛な二項対立が生じ、原子力界の閉鎖体質（原子力ムラ）ができあがったことが事故の遠因につながっている。「責任の分散」においては、日本では安全に関するすべての責任が事業者に課せられており、夫々の役割と責任が決められているが、福島第一原発事故を防ぐことができなかった。形式的な体制により真のプロフェッショナルが育ってこなかったと言う反省がある。しかし、メーカーや工事会社及び規制の責任がないがしろにされて良いと言うものではない。福島第一原発事故は「安全の考え方」にも問題があった。それは「リスクの大きさの考慮不足」「言葉上の安全安心」「残余のリスクに対する無防備」「ご都合主義的解釈」「潜在的脅威（リスク）に対する無関心」「長期保全感の欠如」である。大津波の警告に対し対策を先送りしたことは原子力ムラと呼ばれる「共同体化」の問題があるかもしれない。組織は大きくなると守ろうとする意識が強くなり、不合理が通り組織は腐敗する。自分の組織は守ったがそれで国をつぶすことにもなる。「経営力」の問題としては、執行部門と独立したボードや監査部門のチェックが機能しないと、執行部の独走により原子力安全が担保できない場合が出てくる。特に原発の管理層、経営層は高い緊張感を持って経営に当たらねばならない。津波対策は、現行制度の中では料金原価に含めて回収することも可能であったわけであるから、経営リスクを見落とし、経営資源の投入方向とタイミングを誤ったことは間違いない。

以上、時間を惜しみながらの熱演で、原子力技術者にとっては大変示唆に富む講演であった。北村氏は最後に、事故の背景は歴史によって積み上げられ、原発は典型的な巨大技術で組織も大きいため、自分たちを守るために組織が硬直化し自由な発想が排除されるようになると本当の危機管理ができなくなる。技術者やリーダーの責任は重く、また適切なリーダーを選ばなかったリーダーも悪い。そして福島第一原発事故の歴史に真摯に学び、今後の危機管理や原子力安全に反映していくことが重要であると締めくくられた。

以上